

# 「糸賀一雄の最後の講義」ドイツ語共訳を終えて ～翻訳の苦労・工夫と翻訳による新たな発見～

川内 紀世美\*

## 要旨

糸賀一雄『糸賀一雄の最後の講義——愛と共感の教育——』（2009年、中川書店）ドイツ語共訳を通して、「共感」、「糸賀園長先生」、「環境的障害」、「発達（発達保障）」、「幼稚園・保育所・託児所」という用語の翻訳に伴う考察、および、英語訳とドイツ語訳との比較、すなわち、糸賀一雄『愛と共感の教育——最期の講義』（1972年、柏樹社）と本書の比較を行った。日本語とドイツ語の意味内容の相違を捉えながら、糸賀の意図を明らかにすることが本研究のねらいである。そして、糸賀が生きた時代の社会福祉、保育、障害児教育の有様を推察を試みた。

糸賀は、彼の講義の中で「その子どもがどういうふうな発達を遂げ、どういうふうな教育をうけるところの権利」という言葉を用いて「発達（発達保障）」の概念を受講者に伝えた。ドイツでは「発達（発達保障）」ということは一般的にあまり聞かれないといわれる。しかしながら、ドイツ連邦共和国基本法において「自らの人格の自由な発展（発達）を求める権利を有する。」と定められており、「発達（発達保障）」に通じる理念がドイツ国家の基本法に示されている。ドイツでは、基本法の中に「発達（発達保障）」という概念が含まれていると解すれば、福祉や教育の分野において「発達（発達保障）」を論じるに及ばず、そうした理由で、言葉が一般的に聞かれないのではないだろうか。さらにまた、英語訳とドイツ語訳との比較においては、それぞれに「欲求」、「要求」という異なる語で表現されているところがあるが、講義の録音自体には「欲求」ないし「要求」の語は、この箇所にはみあたらないという。「欲求」、「要求」が書き加えられた意図は不明である。考察および比較検討により、「発達（発達保障）」をはじめとする用語の意味内容を吟味し、新たな発見があった。ドイツ語仮訳を改めるための課題を見出すことができた。

キーワード：糸賀一雄、近江学園、発達（発達保障）、社会福祉、障害児教育

2023年1月17日受理

## はじめに——ドイツ語共訳の経緯

「この子らを世の光に」の言葉を遺したことで知られる糸賀一雄は、1914（大正3）年に鳥取市で生まれ、旧制松江高等学校（現在の鳥根大学／1930〔昭和5〕～35〔10〕年）を卒業後、京都帝国大学文学部で哲学を修めた（1935～38〔13〕年）。1940（15）年に滋賀県庁に奉職した糸賀は、1946（21）年に池田太郎（1908～1987年）、田村一二（1909～1995年）らと共に近江学園を創設して園長となり、数々の関連施設を設立していった。知的障害児の教育福祉の先駆者であり、「障害福祉の父／社会福祉の父」とも呼ばれている。

糸賀は、1968（昭和43）年9月17日に大津市で行われた滋賀県児童福祉施設等新任職員研修会での「施設における人間関係」と題した講義（予定を延長して約2時間にわたる）の終盤に倒れ、翌日逝去した（享年54）。訳出したのは、その最期（最後）の講義録である。（糸賀の略歴部分には和暦を括弧書きした。）

講義録<sup>1</sup>は1969年に『愛と共感の教育——最期の講義』（柏樹社／まみず新書19、62頁・18cm）として出版され、そして1972年には『精薄児の父糸賀一雄講話集 愛と共感の教育（増補版）』（柏樹社／柏樹新書11、174頁・18cm）の中に収録される形となった。その後しばらく絶版となっていたが、2004年に大木会

\*大阪健康福祉短期大学 保育・幼児教育学科

後援会が1969年版を復刊（非売品／60頁・18cm）し、2009年には『糸賀一雄の最後の講義——愛と共感の教育——〔改訂版〕』（中川書店／87頁・19cm）に改題し刊行された。

講義録は元神戸大学教授・渡部昭男氏が主導する形で、これまでに4か国語に翻訳（仮翻訳）がなされている。すなわち、2015年の中国語訳（王明浩、金栩、雨时）<sup>2</sup>を皮切りに、韓国語訳（김선옥（金仙玉）、박지민（朴祉政）、장주선（張主善）、2016）<sup>3</sup>、英語訳（中野リン、根岸華子、2018）<sup>4</sup>、フランス語訳（若木剛、若木ローズ・メ、2021）<sup>5</sup>であり、これらすべてが「神戸大学学術成果リポジトリKernel」にアップされ公開されている。

フランス語訳を担当した若木ローズ・メ先生は、筆者にとって大学時代の恩師（鳥取大学非常勤講師）である。筆者は学生時代に柏樹社版『愛と共感の教育』（1972）を読んで感動したこともあり、このような微かな記憶の繋がりに感化されたのが翻訳に向かうきっかけとなった。また、本学の松江キャンパスに近い島根大学は旧制松江高等学校の時代、若き糸賀一雄の学び舎であり、ここにも「ご縁」といえようか、繋がりを感じた。島根（松江）の偉人でもある糸賀一雄の思想と実践を本学の学生に伝えるとともに、かつて留学してお世話になったドイツの方々にも読んでいただけるものを届けたいと思った。ということで、昔聞きかじったドイツ語への翻訳を渡部昭男教授に申し出て了解を得た次第である。とはいえ拙いドイツ語である故、島根大学ドイツ語特任講師・シュルツ ローランド（Roland Schulz）先生に共訳者をお願いした<sup>6</sup>。

## 1. 翻訳に際しての留意点、翻訳の難しさ

講義録は、糸賀自身がテープ録音した記録をもとにしたものである。そして、テープが途切れている部分は近江学園の宇野あさ子指導員と久瀬美智子保育士（保育士）のノートの記録を用いて補足したほか、「編者の責任において多少の補筆・修正はあるが、ほとんど録音そのままである」（1972年、柏樹新書、p.10）と記されている。さらに、改訂に際して、「講義の中で、力説して繰り返し述べられているところやソフトな語り口調など、その終盤の熱のこもった迫力を少しでも臨場感をもって読んでいただけるものにした」と、あらためてテープからおこした（2009年改訂版、p.3）という。したがって、①録音記録（1968年）、②柏樹

社版（1969・1972年）、③中川書店版（2009年）では、その内容が微妙に異なっていることに留意する必要があるが出てくる。

我々のドイツ語共訳は③中川書店版に基づくものであるが、英語訳（中野リン、根岸華子）は手違いから提供してしまった柏樹社版データによるものである。そうした経緯もあって、本稿では②柏樹社版との対比も行って巻末に資料として収めた。加えて、①録音記録との相違もあることについて、鳥取短期大学教授・國本真吾氏からご教示をいただいた。

講義録の翻訳の難しさは、執筆された原稿（文語体）ではないところにある。口語体であるため、一つの文が長く続く箇所がいくつもあり、日本語の読み手としては糸賀の伝えたいことは理解できるのだが、簡潔に言い直すとしたらなかなか難しい。

例えば、『講義』の冒頭の文に「およそ教育というものとは」とあるが、「およそ」をどう訳すのか思案し、漢字で「凡そ」とし、ドイツ語のallgemein（一般的な、普遍的な、全体的な）と訳した。これには二、三日を要した。このように僅かな語句の言い回しをできるだけ忠実に訳すことを試みた。「およそ」はそのままであるが、箇所によってはかえってその試みが仇となり、翻訳全体では、シュルツ先生が修正案を提示し、大幅な校正があった。

ユーモアを交え、若い保育士（保育士）らに優しい口調で語りかける講義は、一見、易しい内容と感じられる。ところが、講義の文章には、哲学者、教育者、学識経験者という糸賀を想起させる言葉がちりばめられている。実は難しく硬い言葉を軟らかくさらっと言うところにも糸賀の卓越した表現力が現れていると思われる。

## 2. 「共感」の始まりはドイツ語

講義録を象徴する「共感」はドイツ語訳をEinfühlungsvermögenとしたが、これは、Einfühlung（感情移入、共感、同情）とVermögen（能力、～できること）を合わせた語であり、「共感」とはすなわち「感情移入できること」という意味である<sup>7</sup>。英語のempathy（共感）としてのEmpathieというドイツ語はあるものの、専門的な響きがあり、Einfühlungsvermögenが一般的である。日本語でも「共感」と「エンパシー」と聞いて、カタカナの「エンパシー」よりも前者の「共感」がしっくりくる人が多い

のではないだろうか。

20世紀初頭に、ギリシャ語の *en* (中) と *pathos* (感情) に由来する *emphatheia* (心の状態) を語源とするドイツ語の *Einfühlung* が、哲学・美学において「感情移入」という意味で使われ始めた。それが、英語の *empathy* (共感、感情移入) に訳され、新しい意味で使われるようになった。また、*Einfühlung* には *sympathy* (共感、同情、感情移入) という意味が含まれる場合もある。講義録の中の「共感の世界」という小見出しには、哲学的な意味を与えるため、*Empathie* を用い、「Eine Welt der Empathie (A world of empathy)」とした。

### 3. 糸賀園長先生／びわこ学園創設者糸賀

講義録の前置き<sup>8</sup>に、近江学園の職員という言葉であろうか「糸賀園長先生は、」<sup>9</sup>という親しみの込められた呼び方がある。講義には近江学園、びわこ学園など、糸賀が尽力して生み出した施設が登場している。

びわこ学園の初代園長は医師の岡崎英彦(1922～1987年)であり、糸賀はびわこ学園の園長は務めていなかったこと、またさらに、講義録が近江学園の職員二人の記録を用いた補記を含んでいることを鑑みると、近江学園の園長先生という意味であることが明らかになる。加えて、中川書店版には当日の「資料 講義用メモ」が収録されており、「施設における人間関係／近江学園長 糸賀一雄」と自著されてもいる。

滋賀県職員として奉職していた糸賀は、近江学園園長、びわこ学園創設者、大木会理事等としても数々の責務を果たしてきた。いずれの意味の「園長先生」なのかを明確にするために、「der Gründer Itoga der Biwako-Gakuen (びわこ学園創設者の糸賀 the founder Itoga of Biwako-Gakuen)」と訳し、重ねて確認して注記した脚注に説明を補足した。「資料 講義用メモ」が収録されていない柏樹社版データをもとに翻訳した英語訳では単なる誤記であろうが、「Principal Itoga of Biwako Gakuen (びわこ学園園長糸賀)」となっていたところに引きずられて「びわこ学園」にこだわってしまった。糸賀はびわこ学園の園長には就任しておらず、びわこ学園の初代園長は岡崎である。冷静に考えれば「園長先生」とは「近江学園の糸賀園長先生」という意味が確かで、der Direktor Itoga der Ohmi-Gakuen が適訳だと考えなおし、ここは修正したい箇所である。

【ドイツ語仮訳、p.2、脚注2 (途中から)】

Itoga gründete mehrere Wohlfahrtseinrichtungen für Menschen mit Behinderungen. Zu dieser Zeit war er Direktor der sozialen Einrichtung Ohki-Fukushikai. Zusammen mit Dr. Hidehiko Okazaki, einem Arzt der Ohmi-Gakuen, eröffnete Itoga 1963 die erste Einrichtung für schwerbehinderte Kinder in Westjapan, die sogenannte Biwako-Gakuen.

糸賀は、障害のある成人のための数々の職業指導の機関も設立した。その当時、彼は財団法人大木会の理事であった。糸賀は1963年、近江学園の医師、岡崎英彦博士と共に、びわこ学園という、西日本で初めての重症心身障害児の施設を開設した。

*Itoga founded several welfare institutions for people with disabilities. At that time, he was the director of the Ohki-Fukushikai social institution. Together with Dr. Hidehiko Okazaki, a doctor of the Ohmi-Gakuen, Itoga opened the first institution for severely disabled children in western Japan in 1963, called Biwako-Gakuen.*

近江学園は1946年に創立された。その内部団体の近江学園大木会は、1956年に財団法人大木会として独立した社会事業団体となった。糸賀は、大木会の顧問を委嘱された。1959年には、滋賀県の了解を得て、大木会理事に就任した<sup>10</sup>。びわこ学園は、1958年9月に財団法人大木会の理事会で重症心身障害児施設の建設案が決定されてから、1963年の開園までに5年かかった<sup>11</sup>。

それまでに近江学園では、1950年に知的障害の重い子どもたちの生活の場「落穂寮」を開設し、1952年に「さくら組」を編成し、1953年に様々な問題をかかえた子どもたちの「杉の子組」、および、障害が強い年長児の「檜組」を発足させ<sup>12</sup>、医局では重度障害児の療育を開始している<sup>13</sup>。糸賀は、1956年には「医療教育施設」が必要であろうと考えていた<sup>14</sup>。落穂寮開設からびわこ学園開園までは、子どもたちの命を守るためにその建設を急ぎながらも、13年という長い歳月を要した。

#### 4. 環境的障害

##### (1) 「環境的障害」の意識「社会的不利」の検討

講義録ではまた、保育所を「環境的障害」<sup>15</sup>に対応する専門的な施設と捉えている。ドイツ語では「環境」をUmgebung、Umwelt (environment) という。近年の日本の保育ならびに幼児教育では「環境構成」や「環境」という専門用語が普及していることでもわかるように、本来の人間を取り巻く自然などの広義の「環境」という意味とはやや離れた語法がある。しかし、ドイツ語では「環境的障害」を直訳できる言葉が見当たらず、「sozialen Benachteiligungen (社会的不利、social disadvantages)」という語を用いて訳出した。

この「環境的障害」とは、1980年のWHO国際障害分類 (ICIDH) における「社会的不利 (handicap)」に相当するもしくは類似していると考えられ、2001年の国際生活機能分類 (ICF) 構成要素にも「環境因子 (environmental factors)」という用語が示されている<sup>16</sup>ことから、このような訳を導いた。ところが、「環境的障害」を「社会的不利」と同義とみなすには無理がありそうである。この度のドイツ語訳が適切かどうか、精査して検討していきたい課題である。

##### (2) 人格形成、人間形成としての保育・教育

糸賀は、彼の著書『福祉の思想』の中に、「施設養護は、単に本人にとって適当でない環境から施設に移すという生活拠点の転換というだけのものではない。家庭に代わるものという機能をはたすだけではなく、そこで治療的な効果が期待される。」<sup>17</sup>「施設という集団生活のなかで、個の人格が形成される場として教育実践やグループ・ダイナミックスの意味を積極的にもつのである。」<sup>18</sup>と記している。ここで、「環境」という言葉を用い、適当な環境とは、「集団生活」であり、かつ「個の人格が形成される場」という意味を含むことが指摘されている。おそらくこの場合の施設は、障害児の入所施設を指しているであろうが、児童福祉施設である保育所という通所施設にも適う意味であると考えられる。

さらに、時代背景として、当時の精神薄弱児施設のような入所施設や保育所は「措置」としての児童福祉施設であり、措置事由が医学的な障害であれ、環境的な障害であれ、障害により「欠ける」<sup>19</sup>ものがあるとされ、欠けたものを補うことが施設の役割だという認識があったであろう。

1971 (昭和46) 年10月5日の中央児童福祉審議会「保育所における幼児教育のあり方について」<sup>20</sup>において、保育に欠ける状況として、「住居が狭小であったり、住居全体が仕事場になっているために、児童の生活の場が犯されている、といった家庭の状況によるもの、近所に適当な遊び場がないとか、事故多発地帯であるというように、地域の状態が不適当なもの」という、環境ともいえる家庭の状況や地域の状態が不適当なことがあげられている。これは、1963 (昭和38) 年7月の中央児童福祉審議会保育制度特別部会「保育問題をこう考える—中間報告—」<sup>21</sup>における、保育に欠ける状況の定義とは「子どもの心身の発達にとって不可欠のものを与えられていない状況」という考えに基づいている。

講義録ではまた、養護に欠ける、保育に欠けるということ「社会的な条件の一つが保育に欠けておる」<sup>22</sup>といい、「社会的な条件」という言葉を用いて説明していることから、「社会的不利」の訳語につなげることができよう。

さらに、1963 (昭和38) 年10月28日の各都道府県知事あて文部省初等中等教育・厚生省児童局長連名通達「幼稚園と保育所との関係について」の中で「保育所は、『保育に欠ける児童』の保育 (この場合幼児の保育については、教育に関する事項を含み保育と分離することはできない。)」<sup>23</sup>として、幼稚園と保育所の機能は異なるが「人間形成の基礎をつちかう幼児教育」<sup>24</sup>はどちらにも重要であることを示している。これは、講義録の中で「保育とはつまり教育です。教育に欠けておる環境のなかから、何とかしてその環境の欠陥をうずめていかななくてはならない」<sup>25</sup>とし、「保育所も幼稚園も、本質的には子ども自身にとっては一所なんだ」<sup>26</sup>という糸賀の言葉につながる。

つまり、乳幼児が人間形成を培うための社会的条件が欠ける状態を「保育に欠ける」としていたのではなかろうか。そうした時代に、糸賀は「環境的障害」という言葉を用いたのである。

##### (3) 保育元年：「環境的障害」克服の始まり

糸賀は「環境的障害」「身体的障害」「精神的障害」の3つそれぞれに対応する専門的施設を引き合いに出して説明を試みている<sup>27</sup>。後者の2つは機能障害にかかわるものである。しかし、筆頭にあげている「環境的障害」は直接的に機能障害を表しているものではない

い。障害の有無にかかわらずどのような子どもにも起こりうる障害としての「環境的障害」をこのように重視しているのは、糸賀が、障害そのものよりも子どもたちの生活環境の改善、人間関係の深化に重きを置いていたということが読み取れる。

『糸賀一雄の最後の講義』から5年経った、1973年は「保育元年」と呼ばれ、滋賀県大津市で保育所や幼稚園で障害児保育が始まった<sup>28</sup>。糸賀の「これは今の保育所なんかは環境的障害に入りますね。」<sup>29</sup>という言葉は、解釈するのに悩み、最後に翻訳した箇所である。「今の保育所」とは1973年以前の保育所であり、障害児をもつ保護者が希望しても必ず入所できる施設ではなかった。入所できないことを「障害」と解釈することもできる。

それとは別に、ひとたび、障害の有無にかかわらず、子どもが入所できるのであれば、「保育を受けられない」そのうえ、「集団生活のなかで、個の人格が形成される教育を受けられない」という社会的不利を「保育を受けられる」、「集団生活のなかの教育で人格を形成していける」ようにすることで社会的不利が取り除ける施設と解釈できる。すなわち、保育所そのものが健常児であろうが障害児であろうが、子どもを取り巻く環境的障害に対処しうる施設という解釈である。

後者の、子どもを取り巻く環境的障害に対応できる施設という意味で、1947年に規定された児童福祉法による保育所を指していると仮定して、「これは今の保育所なんかは環境的障害に入りますね。」という一文を、ドイツ語訳の中では次のように説明を補うような表現にした。

【ドイツ語仮訳、p.5／中川書店版、p.12】

Das bedeutet, dass Kinderbetreuungseinrichtungen jetzt so konzipiert sind, dass sie soziale Benachteiligungen beseitigen.

つまり、社会的不利を解消するための保育施設が登場したのです。（「これは今の保育所なんかは環境的障害に入りますね。」の意識）

*This means that childcare facilities are now designed to address social disadvantage.*

## 5. 発達（発達保障）

教育や福祉において「～を保障する」という言葉は、今日では当たり前のように使われる言葉である。糸賀は「発達保障」を提唱したことでもよく知られて

いる。ところが「発達保障」を今もなお、専門的で難解なイメージで捉える者も少なくないであろう。講義録では、「発達（発達保障）」の概念を「発達保障」という言葉ではなくて、「発達」「権利」「保障」という言葉を用いてやんわりと、しかし、熱く語っているところがある。本稿では講義録の「発達」に「（発達保障）」を補足して表記する。

【ドイツ語仮訳、p.4／中川書店版、p.12】

Man muss genau hinschauen, wie sich die Kinder entwickeln und ausloten, was für Rechte auf Erziehung ihnen zustehen.

その子どもがどういうふうな発達を遂げ、どういうふうな教育をうけるところの権利をもつかということ、じっと味わい、にらみつけていかなければいかんわけですね。

*You have to look closely at how the children develop and explore what rights to education they are entitled to.*

【ドイツ語仮訳、p.4-5／中川書店版、p.12-13】

Die Kinder selbst sollten sich auf gesunde Weise entwickeln können. Wir müssen Kinder als Wesen mit Rechten betrachten, aber sie befinden sich in einem Umfeld und unter Umständen, in denen dies nicht ausreichend gewährleistet ist. Die Frage muss lauten, wie dies gewährleistet werden kann.

子ども自身は、そういう健康な発達というものを当然するべきものである。権利の主体であると考えなければなりませんのに、それが十分に保障されていないという環境や境遇におかれているわけです。それがどうしたら保障できるかということではなければならないわけです。

*The children themselves should be able to develop in a healthy way. We need to look at children as beings with rights, but they are in an environment and circumstances where this is not sufficiently guaranteed. The question must be how this can be ensured.*

これらは教育や福祉の課題として、今日の私たちにも響く言葉である。

「発達（発達保障）」に関する言葉を、日本語、ドイツ語、英語、フランス語の対訳の一覧表『「発達（発達保障）」に関する用語』を作成してみた（表1）。

(表1) 「発達(発達保障)」に関する用語(日本語/ドイツ語/英語/フランス語)

日本語	ドイツ語	英語	フランス語
子ども/子どもたち	Kind/Kinder	child/children	enfant/enfants
発達	Entwicklung	development	développement
成長/養育	Aufwachsen	growth, grow-up/upbringing	grandir
成長(思春期の成長)	Heranwachsen	adolescence, teenage years	adolescence
適した、相応しい	gerecht	equitable, fair	équitable
権利	Recht	right	droite
保障/保障する	Gewährleistung/gewährleisten	warranty/guarantee	garantie/garantir
保障/保障する	Gewähr/gewähren	guarantee/guarantee	garantie/garantir
保障/保障する	Garantie/garantieren	guarantee/guarantee	garantie/garantir
保障/保障する	Sicherheit/sichern	assure/ensure	assure/ensure
権利の保障	Gewährleistung der Rechts	guarantee of the right	garantie du droit
子どもの権利の保障	Gewährleistung der Rechts der Kinder	guaranteeing the right of children	garantir le droit des enfants
発達の権利の保障	Gewährleistung der Rechts auf Entwicklung	guaranteeing the right to development	garantir le droit au développement
相応しい発達の権利の保障	Gewährleistung der Rechts auf eine gerechte Entwicklung	guaranteeing the right to equitable development	garantir le droit à un développement équitable
相応しい成長の権利の保障	Gewährleistung der Rechts auf ein gerechtes Aufwachsen	guaranteeing the right to equitable upbringing	garantir le droit de grandir équitable
相応しい成長の権利の保障	Gewährleistung der Rechts auf ein gerechtes Heranwachsen	guaranteeing the right to a equitable adolescence	garantir le droit à une adolescence équitable

(筆者作成)

「『発達保障』という考え方は日本発信の思想」<sup>29</sup>とされているように、ドイツでは「発達保障」、「発達を保障する」という言葉や概念が一般的にはないようである。したがって、対訳は直訳にしており、意味内容を含め、正誤を検討していきたい。

ところが「ドイツ連邦共和国基本法(Grundgesetz für die Bundesrepublik Deutschland)」第2条第1項では、「何人も、他人の権利を侵害せず、かつ憲法的秩序または道徳律に違反しない限り、自らの人格の自由な発展を求める権利を有する。」と定められている<sup>30</sup>。

「発達 Entwicklung」と同義語の「発展 Entfaltung」を「発達 Entfaltung」と読み替えることにより、発達の権利が基本法で守られているとも捉えられよう。しかも、「自らの人格の自由な発展(発達) die freie Entfaltung seiner Persönlichkeit」であり、定型の発達ではなくて、人それぞれの人格の「自由な freie」発展(発達)を求める権利を有することが定められている。ドイツでは、基本法の中に「発達(発達保障)」という概念が含まれていると解すれば、福祉や教育の

分野において「発達(発達保障)」を論じるに及ばず、そうした理由で、言葉が一般的に見られないのではないだろうか。

元立命館大学教授、人間発達研究所所長・中村隆一先生には、日本に「発達」という概念が西洋から導入された経緯や「発達」という言葉に定まった理由等を伺い、日本の「発達」の受容に関するご示唆をいただいた。「発達」の概念を理解するために、今後の課題としたい。

## 6. 幼稚園、保育所、託児所

日本政府は幼稚園と保育所の一元化を目指して政策を進めている。その過渡期といえようか、幼児教育、保育をめぐる諸課題を早急に解決しようと、新たな政策が次々と打ち出されており、乳幼児を対象とする学校・施設は、主に幼稚園、保育所、幼保連携型認定こども園の三施設と、それ以外の保育事業による実質一元化状態となっているのが現状である。

講義録には、「幼稚園」、「保育所、保育園」、「託児所」が繰り返し登場し、その当時はまさに、幼稚園と

保育所の二元化の時代であった。ただし、4.(2)で記述の1963(昭和38)年の文部省ならびに厚生省の連名通達や、講義録の糸賀の言葉からは、幼稚園と保育所は機能が異なるとしているものの、両者とも「人間形成の基礎をつちかう」として、目指すところは同じだと考えられるため、一元的な見方があったともいえるようだ。

「幼稚園」は、フレーベル(Friedrich Wilhelm August Fröbel, 1782~1852年)の教育思想が明治期に日本に導入され、フレーベルの造語「Kindergarten」を「幼稚園」としたことが始まりである。それでは、ドイツに「保育所」や「託児所」あたるものがあるかといえば、制度上、日本とは異なるもののそれらはあり、そのドイツ語を用いて訳した。「保育所(児童通園施設<sup>31</sup>、児童昼間居所<sup>32</sup>)」は「Kindertagesstätte(略称 KITA)」、「託児所(保育所)」は「Kinderkrippe」と訳した。

ドイツ語訳では「児童通園施設、児童昼間居所」と呼ばれる「Kindertagesstätte」を『講義』の「保育所」にあて、「保育所」と呼ばれる3歳未満児のための「Kinderkrippe」を『講義』の「託児所」にあてた。「保育所(児童通園施設) Kindertagesstätte」は、「Kinderkrippe」、「Kindergarten」と、基礎学校(Grundschule)入学以降の6歳から12歳<sup>33</sup>が放課後に通う「学童保育所 Kinderhort」の三施設を一か所にまとめたもの<sup>34</sup>で、0歳から就学前までの乳幼児が通えることから、日本の「保育所」に類似した形態の施設であると考えたからである。

日本には、幼稚園と保育所の二元化といわれる通り、3歳から就学前の子どもが通うことができる幼稚園と、0歳から就学前の子どもが通うことができる保育所とがある。3歳から就学前までは、幼稚園あるいは保育所のいずれかに通うことができる制度となっている。ドイツの場合は、州によって保育制度が異なっているものの一般的には、0歳から2歳までは「託児所(保育所) Kinderkrippe」に、3歳から就学前までは「幼稚園 Kindergarten」に通うことができる。子どもの年齢に応じて保育所と幼稚園の棲み分けをしながら、年齢に応じた一貫した「幼児教育・保育」制度となっているのではないだろうか。日本の「幼稚園」

ならびに「託児所(保育所)」と、ドイツの「Kindergarten」および「Kinderkrippe」とは制度上、対象児の年齢層が異なることに留意されたい。

「託児所」は、Kinderkrippe と訳したが、これは乳幼児を預かる保育や家庭的保育を行う施設や団体のことを意味している。ドイツには自宅で乳幼児を預かる保育事業の一つに、「保育ママ Tagesmutter」、「保育パパ Tagesvater」というものがある<sup>35</sup>。これらは、日本の厚生労働省所管の家庭的保育、小規模保育C型、居宅訪問型保育のように、保育士の資格をもっていなくても、定められた研修を受けた者が保育者として保育できる制度で、自治体の認定を受けられれば自宅で子どもを預かることもできる<sup>36</sup>。この「保育ママ Tagesmutter」という言葉は、日本の「保育士」のかつての名称「保母」と混同されやすいようだ。

#### 【ドイツ語仮訳、p.2、脚注3】

In Japan wird zwischen Kindergärten (youchien) und Kindertagesstätten (KITAs) (hoikusho) unterschieden, da Kindergärten nach dem Schulbildungsgesetz als Erziehungseinrichtungen und KITAs nach dem Kinderfürsorgegesetz als Kinderfürsorgeeinrichtungen bezeichnet werden. In der Regel sind Kindergärten für Kleinkinder ab drei Jahren gedacht, während KITAs für Säuglinge ab null Jahren vorgesehen sind.

日本では、幼稚園を学校教育法上の教育機関、保育所を児童福祉法上の児童福祉施設であり、幼稚園と保育所を区別している。幼稚園は原則として3歳から、保育所は0歳からが対象である。

*In Japan, a distinction is made between kindergartens (youchien) and day care centers (KITAs) (hoikusho), as kindergartens are referred to as educational institutions under the School Education Act and KITAs are referred to as child welfare institutions under the Child Welfare Act. As a rule, kindergartens are for infants from the age of three, while KITAs are for infants from the age of zero.*

『柏樹社版』 自分の欲求を表現できない子ども

26・しかし、世の中には、常にその代表者を送ることのできない人々がおります。子どもたちはそうです。子どもたちは自己自身を主張する方法をもちません。精神薄弱の人たちも同様です。精神発達が2、3歳でとまっているような、そういう精神薄弱の人は20歳になっても、30歳になっても自己自身を主張するということが難しいわけですね。そういう人たちの欲求はいったい誰が代弁するのでしょうか。

英訳 Children Who Cannot Express their Desires

(48)右→However there are people in this world who cannot find representation. Children are such people; they have no way to express themselves. People with intellectual impairments are the same. It is difficult for people with mental impairments whose psychological development stopped at two or three years of mental age to express themselves even when they reach the age of 20 or 30. Who will speak for these people?

『中川書店版』 自分の要求を表現できない子ども

34・しかし、世のなかには、常にその代表者を送ることのできない人々がおります。子どもたちはそうです。子どもたちは自己自身をですね、主張する方法をもちません。精神薄弱の人たちも同様です。精神発達が2、3歳でとまっているような、そういう精神薄弱の人は20歳になっても、30歳になっても自己自身を主張するということが難しいわけですね。…そういう人たちの要求はいったい誰が代弁するのでしょうか。

ドイツ語訳 Kinder, die ihre Bedürfnisse nicht ausdrücken können

{14/15} Manche Menschen in unserer Gesellschaft können jedoch nicht immer ihre Vertreter entsenden. Dies ist bei Kindern der Fall. Sie haben keine Möglichkeit, sich durchzusetzen. Das Gleiche gilt für Menschen mit geistigen Gebrechen. Menschen mit geistiger Behinderung, deren geistige Entwicklung im Alter von zwei oder drei Jahren zum Stillstand gekommen ist, haben auch im Alter von zwanzig oder dreißig Jahren noch Schwierigkeiten, sich durchzusetzen. [...] . Wer wird also für ihre Bedürfnisse eintreten?

段落はじめの数字は、それぞれが掲載されているページ数を表している。下線は筆者による。(筆者作成)

7. 英語仮訳とドイツ語仮訳の比較より

「はじめに」で記述のように、英語訳(2018)は②柏樹社版(1969・1972年)を、ドイツ語訳(2022)は③中川書店版(2009年)を翻訳したものである。②柏樹社版と③中川書店版とでは、表現が若干異なっている箇所があり、そのために、英語とドイツ語では表現が異なる箇所がいくつかある。

例えば、②柏樹社版の「そういう人たちの欲求はいったい誰が代弁するのでしょうか。」<sup>37</sup>という表記は、③中川書店版では「そういう人たちの要求はいったい誰が代弁するのでしょうか。」<sup>38</sup>となっている。こ

こに、「欲求」と「要求」の相違が見られる。(表2)

鳥取短期大学教授・國本真吾氏の指摘によると、糸賀一雄の講演の録音自体には「欲求」ないし「要求」の語は、この箇所にはみあたらないという。録音では、「欲求」も「要求」も語られておらず、「そういう人たちは誰が代弁するのでしょうか。」と、「代弁」が強調される話し方である。

英訳では②柏樹社版の中の「欲求」にあたる「desires」の語は用いられておらず、「そういう人たちは誰が代弁するのでしょうか。」が「Who will speak for these people?」と訳されており、録音にある糸賀の

表現と同様であるとみなすことができる。それに対して、ドイツ語訳では③中川書店版の中の「要求」にあたる「Bedürfnisse」を用いて、「そういう人たちの要求はいったい誰が代弁するのでしょうか。」を「Wer wird also für ihre Bedürfnisse eintreten?」とした。

「欲求」、「要求」が書き加えられた意図は不明である。國本氏には、編者による補筆・修正がある旨が柏樹社版で示されているため、再録での変更も含め、どこがその部分なのかは音声と照らし合わせていかなければ分からないとご教示いただき、あらためて、原典の基になる音源に当たることが重要だとわかった。

その他に、「それはもう、カーと、こんなになっているしね、いろいろいるんですよ。」<sup>39</sup>が、訳出できなかった。糸賀は、身近に接している子どもたちに親しみと愛情を込めてこう語っているのであろうが、訳によっては、淡泊な、愛も共感もない表現になりかねず、また、「カーと」というのが、子どもたちのどのような表情のことを言っているのか思い浮かべられなかったからである。

巻末に（資料）として、主要箇所①『柏樹社版』・②英語訳／③『中川書店版』・④ドイツ語の対訳を付記する。主要箇所の選定には、渡部教授の『柏樹社版』・英訳の対訳資料を参照させていただいた。

ドイツ語訳、英語訳との比較を通して、講義録の中にある表現の細部について吟味していくことができた。②柏樹社版と③中川書店版での補筆・修正に関しては、それぞれが出版された時代の用語の使用や、編者の意図を知り、それを前提として訳することが不可欠であったが、そこまでには力が及ばず、筆者自身の力量不足を感じた。

糸賀一雄の生きた時代に糸賀が語った言葉は、その時代の障害者のおかれていた社会情勢を知るほど、その言葉の重みに気付かされる。『福祉の思想』の中の、「施設養護は、単に本人にとって適当でない環境から施設に移すという生活拠点の転換というだけのものではない。家庭に代わるものという機能をはたすだけでなく、そこで治療的な効果が期待される。」<sup>40</sup>「施設という集団生活のなかで、個の人格が形成される場として教育実践やグループ・ダイナミックスの意味を積極的にもつのである。」<sup>41</sup>という言葉は、現代では自明のように響くが、糸賀ら先駆者がいたからこそ今に発展してきたのであり、そこに、糸賀の思想を学ぶ意義を見出せると考えられる。

## おわりに——ドイツ語仮訳への助言より

ドイツ語仮訳に補足説明が必要と思われるところには脚注を付した。参考にさせていただきたい。

本稿執筆の過程で、人間発達研究所の田中テキスト勉強会において、仮訳についてのご助言やご指導を受けることができた。日本語の「発達」は中国語では「发展（發展）」といい、ドイツ語の「Entfaltung 発展（発達）」に近いことを学んだ。

日本語の「療育」もまた、国により捉え方が様々であるようだ。講義録には「昔から諸外国で療育という言葉を使っています。治療と教育、治療教育とか、教育的治療とか、（中略）。ドイツ語でハイルペダゴギクという言葉が昔からあります。」<sup>42</sup>という糸賀の説明がある。糸賀は「Heilpädagogik」を「療育」とみている。我々は、ドイツ語でほぼ同義である「Heilerziehung」と訳したが、これは、現代では「療育」というよりはむしろ「障害児教育」と訳されることが一般的なようであり、糸賀のいう「療育」とはやや離れている印象を受けた。そこで、実際に日本語の「療育」と「障害児教育」との相違を念頭におきながら、「Heilerziehung (Medizienische Betreuung und Erziehung) 療育（医療と教育）」として、説明的に補足した形にしてみた。

田中テキスト勉強会ではまた、韓国語訳をご担当された愛知みずほ短期大学准教授・金仙玉先生にお話を伺うことができた。金先生によれば韓国語でもハイルペダゴギク (Heilpädagogik) は日本語と同じく障害児教育と訳されるようだ。言語により、直訳できる言葉もあれば、そうでない言葉もある。それぞれの国の人々が使う言語や、講義録に関しては、時代背景を考慮しながら、その言葉のもつ意味やその言葉を発した人の意図を汲みながら翻訳をしなければならなかった。しかし、本稿を通じて、言語を変換することに力を注ぐあまり糸賀一雄について十分に調べないまま翻訳作業を進め、反省点や翻訳の検討課題が次々に明らかになった。筆者の糸賀一雄研究は入り口に過ぎないことを身につまされた。

講義で糸賀が最後に語ったのは、「『この子らを世の光に』と『この子らに世の光を』の違いについてね、『この子らに』でなく『この子らを』……」<sup>43</sup>だという。ドイツ語では「Lasst diese Kinder das Licht der Welt sein! (この子らを世の光に。)', 「Gebt diesen Kindern das Licht der Welt! (この子らに世の

光を。)」とした。「この子らを世の光に。」とは何か、『福祉の思想』においては、「この子らはどんなに重い障害をもっている、だれととりかえることもできない個性的な自己実現をしている（中略）。その自己実現こそが創造であり、生産である。」<sup>44</sup>そのためには、「この子らが、生まれながらにして持っている人格発達の権利を徹底的に保障せねばならぬ」<sup>45</sup>と記されている。言い換えれば、「この子らを世の光に。」という理念を実現することは、「発達（発達保障）」を守ることにより達成されるともいえよう。

「強いて申せば、この世の中では何より『人間が一番好き』という位『人間探求』に終始したと云えましょう。」<sup>46</sup>これは、糸賀一雄が亡くなった1年後に

出版された『ヨーロッパ便り』（糸賀一雄、1969）の「あとがき」で彼の妻・糸賀房が夫について記した言葉である。糸賀の人間探究をわかりやすく、ときおりユーモアを交えながら若い職員に語りかけているこの『糸賀一雄最後の講義——愛と共感の教育——』を、広く読んでいただきたいと願う。

#### 【謝辞】

糸賀啓治様・中川書店様の翻訳へのご理解、ならびにシュルツ ローランド先生の共訳の労に感謝を申し上げます。また、人間発達研究所の田中テキスト勉強会で本稿の下書きをもとにご指導ご鞭撻いただいた皆様に、記して御礼を申し上げます。

（資料） 糸賀一雄の最期の講義 主要箇所『柏樹社版』・英語訳／『中川書店版』・ドイツ語訳 対訳

- ① 糸賀一雄（1972）「愛と共感の教育——最期の講義」『愛と共感の教育（増補版）』新書版9～55頁、柏樹社
- ② 根岸華子・中野リン（2018）「英語訳」『教育科学論集』  
⇒神戸大学Kernel <http://www.lib.kobe-u.ac.jp/repository/81010166.pdf>  
Education with Love and Empathy: The Last Lecture of Kazuo Itoga
- ③ 糸賀一雄（2009）『糸賀一雄の最後の講義——愛と共感の教育——〔改訂版〕』中川書店
- ④ 川内紀世美、ローランド・シュルツ（2022）「ドイツ語訳」  
⇒神戸大学Kernel <https://da.lib.kobe-u.ac.jp/da/kernel/0100476491/0100476491.pdf>  
Der letzte Vortrag von Kazuo Itoga: Erziehung mit Liebe und Einfühlungsvermögen

小見出し：頁 日本語／改訂版・中川書店（2009）  
英語訳  
ドイツ語訳

頁	日本語／増補版・柏樹新書（1972）
頁	（英訳頁）
頁	日本語／改訂版・中川書店（2009）
頁	{独訳頁}

01 はじめに 1968年9月17日滋賀県児童福祉施設等新任職員研修会「施設における人間関係」  
翌9月18日午後2時15分逝去

02 講義録『愛と共感の教育——最期の講義』柏樹社（1969）→絶版→改訂版（あらためてテープからおこした）

## 08 子どもは教育の主人公

Children Are the Protagonists of Education

**Kinder sind die Protagonisten in der Erziehung**

11・学校であろうと、福祉の施設であろうと、およそ教育というものは、人間と人間との関係のなかで行われてゆくものです。そして保母や教師と子どもたちとの間に、よい人間関係がえられることによって、子どもたちはよい方向へ人間的な成長をとげてゆきます。それでは、どのようにして、その「よい人間関係」が実現されてゆくのだろうか。

(44) 右→Whether education takes place in schools or welfare facilities, it occurs in the context of relationships between human beings. And by having good relationships between children and caregivers or teachers, children grow in positive directions. How are such relationships achieved?

08・学校であろうと、福祉の施設であろうと、およそ教育というものは、人間と人間との関係のなかで行われてゆくものです。そして保母や教師と子どもたちとの間に、よい人間関係がえられることによって、子どもたちはよい方向へ人間的な成長をとげてゆきます。それでは、どのようにして、その「よい人間関係」が実現されてゆくのだろうか。

{ 2 } Die Erziehung findet, ob nun in einer Schule oder in einer sozialen Einrichtung, allgemein in zwischenmenschlichen Beziehungen statt. Dabei tragen gute Beziehungen zwischen Kindern und Erziehern bzw. zwischen Kindern und Lehrern zudem bei, dass sie sich menschlich in eine gute Richtung entwickeln können. Das Thema des heutigen Vortrages ist die Frage, wie solch »gute zwischenmenschliche Beziehungen« verwirklicht werden können, [...] .

12・保育園でも幼稚園でも、その子どもたちがどういうふうな発達を遂げ、どういうふうな教育をうける権利を持つもつかということ、じっと味わい、にらみつけていかなければいかんわけですね。

(45) 左→In both nursery schools and kindergartens, it is our duty to observe how children develop and to consider what kind of education they should rightfully receive.

12・その子どもがどういうふうな発達を遂げ、どういうふうな教育をうけるところの権利をもつかということ、じっと味わい、にらみつけていかなければいかんわけですね。

{ 4 } Man muss genau hinschauen, wie sich die Kinder entwickeln und ausloten, was für Rechte auf Erziehung ihnen zustehen.

14・そういうふうに、それぞれ対応する専門的な施設の処遇をうけていると言っても、しかし二重・三重に障害が重複、複合している場合は、——二重の場合を重複、三重以上の場合を複合というふうに使われています——単一的に分類された施設では受けとめかねることになり、新しい役割と基準をもった施設が登場してこなければなりません。

(45) 右→In this way, even though they receive specialized treatment at these facilities, if children have multiple disabilities (we use the word “*chōfuku*” when there are two disabilities and “*fukugō*” when there are three disabilities or more), facilities that specialize in handling only one disability cannot accept them. So new facilities with new roles and standards had to appear.

15・そういうように複合している場合というのは、「単一的に分類された施設では受けとめかねることになり、新しい役割と基準をもった施設が登場してこなければならなかった」。

{ 6 } Im Falle einer solchen kombinierten Behinderung, »war es nicht möglich, in Einrichtungen, die nur nach Einzelkategorien klassifiziert waren, aufgenommen zu werden. Daher mussten Einrichtungen mit einer neuen Funktion und neuen Kriterien entstehen.

## 16 レッテル主義と隔離主義

### Labeling and Isolation Policies

#### Eine Gesellschaft des Etikettierens und Isolierens

16・まだまだ成長発達してゆくところの過程にある子どもたちです。ですから、教育をうける対象でもあるが、また教育の主体でもある——こういう考え方があるわけです。

(45) 右→We are talking about children who are still in the process of growth and development. So while children are subjects to be educated, they are also protagonists of education – this is one approach.

17・児童は成長・発達していくところの過程にある子どもたちですからね。ですから、それは教育の機会である。教育をうける対象であり、教育の主体である。こういう考え方があるわけです。

{7} [...], denn Kinder befinden sich in einem Prozess, in dem sie heranwachsen und sich entwickeln. Es handelt sich also um eine Erziehungsmöglichkeit. Sie sind der Gegenstand und Fokus der Erziehung. Das ist die Art zu denken.

16・教護院というのは、むしろ教育機関であり、その教育内容の重点は「読み、書き、算数」を教えることではなくて、その全人格的な高まり、パーソナリティを本当によりよきパーソナリティに高め、…パーソナリティの形成ということなのです。

(46) 左→Protection centers are educational institutions, and the emphasis of that education should not be on reading, writing and arithmetic but rather it should aim to fully develop and enrich the child's personality.

17・教護院というのは、教育機関であり、その教育内容というものは、どういうことに重点があるかと言えば、ただ「読み・書き・算数」を教えるのを教育と言っているのではないんだということです。むしろ教護院の教育内容というものは、その全人格的なですね、パーソナリティというものを本当によりよきパーソナリティに高めていくという…パーソナリティの形成ということですね。

{7} [...] ist eine Jugendbesserungsanstalt [vielmehr] eine Erziehungseinrichtung, und es ist wichtig, darauf hinzuweisen, dass der Inhalt der Erziehung dort nicht nur das Lehren von »Lesen, Schreiben und Rechnen« ist. Bei den Erziehungsinhalten einer Jugendbesserungsanstalt geht es vielmehr um die Entwicklung einer ganzheitlichen Persönlichkeit, einer besseren Persönlichkeit.

18・画一主義の、形式主義のね。レッテルを貼る作業だけが、その子供の処遇だと考える、「この子は愛情欠乏型である」なんてペチャンと額にはって、愛情欠乏型という子どもがそこにできちゃうわけですね。

(46) 右→This kind of thinking reflects an overly rigid attachment to standardization and formalities. By attaching a label such as “this child lacks love” to a child, we create a child who lacks love.

20・画一主義の、形式主義の、レッテルを貼る作業だけが、その子どもの処遇だと考えておる。「この子は愛情欠乏型である」なんてペタンと額に貼ってですね、愛情欠乏型というような子どもがそこにできちゃうわけですね。

{8} Die Leute glauben, mit der Etikettierung des jeweiligen Kindes sei die rechte Handhabung mit diesen Kindern abgetan. Man klebt ihnen ein Etikett auf die Stirn, auf dem steht: »Dieses Kind gehört zur Kategorie, zu wenig Liebe erfahren zu haben.«, und dann erschafft man dort regelrecht ein Kind, das zu wenig Liebe erfahren hat.

## 21 教師がまず豊かな心を

The Teacher Should First Have a Big Heart

### Eine notwendige Sensibilisierung der Erzieher

19・あの官僚主義とは何かというたら、情緒障害をおこしている状態なんです。…あるワケでしか物を見る  
ことができない。豊かな弾力のある、深い、本当にこの奥深い物の見方、巾の広い見方、こういうこと  
ができなくなっているんです。

(46) 右→Bureaucratization actually causes emotional disturbance. It is a condition in which one's  
perspective becomes hardened; when one is able to think only in terms of categories, and the ability  
for rich, flexible, deep and profound vision is lost.

21・よく官僚主義とは何かと言うたら、情緒障害を起こしている状態なんです。…この枠づけの中でしかも  
のが見れない。豊かな弾力のある、深い、本当にこの奥深いものの見方、幅の広い見方という、そうい  
うことがだんだんできなくなる。

{ 9 } Ich sage klar heraus, was Bürokratie ist: Sie ist ein Zustand, der mit Gefühlsstörungen befallen ist. [...] Sie können die Dinge nur innerhalb dieses Rahmens betrachten. Es wird ihnen immer unmöglicher, eine flexible und tiefe, also eine wirklich tiefgehende Sichtweise, eine weitreichende Sichtweise zu haben.

19・読み書き算数のできる人だけが教育をうけた立派な人であるというふうに見てしまう。…精神薄弱児な  
んていうのは、人間的価値がゼロであるということになってしまいます。

(46) 右→They assume that only those who can read, write and calculate are upstanding and educated. In that case, a child with an emotional disturbance or intellectual disability becomes someone with zero human value.

22・読み・書き・算数が人間の価値を決定するということになりますと、精神薄弱の人的な価値というも  
のはゼロであるということになってしまう。

{ 9 } [...] nach den Maßstäben von Lesen, Schreiben und Rechnen als den Wert eines Menschen bestimmt, so haben die geistig schwachen Kinder und die geistig behinderten Kinder einen menschlichen Wert von gleich null.

20・そういったかたくなな気持ちというものから解放されなければならないということです。そういう努力  
が大切なのです。

(46) 右→Under these circumstances, it is extremely important for us to be freed from such a stubborn perspective.

22・そういったかたくなな気持ちというものから解放されなければ、解き放たれなければならない。

{ 9 } [...] , dass wir uns von dieser engstirnigen Sichtweise befreien, dass wir davon loskommen müssen.

20・人間である。人間と人間との関係が人間を形成してゆくという、教育の本質的な構造の中で私たちが導  
かれているわけですから、そういう構造のなかで、私たち教師は自分自身との対決を深めていくとい  
うことが、いかに大きな飛躍であるか、また仕事であるか、また生き甲斐でもあるか！ 本当の生き甲斐  
というものは、そういうところに発生するんだということに私たちは気がつかないといけないと思  
うんです。

(47) 左→We are human. We should be guided by the true structure of education; that is, education that is built on relationships between human beings and in turn creates human beings. As we teachers venture more deeply into the struggle with ourselves, we create opportunities to make great advances, to find worthy work, and to make our lives meaningful. I think that we need to realize that through this process we discover what makes our lives worth living.

23・人間である。人間と人間との関係が人間を形成していくというようなね、教育の本質的な構造のなかに私たちが導かれておるわけですから、そういう構造のなかで、私たちは自分自身との対決を深めていくということがね、それがいかに大きな魅力であるか、また仕事であるか、また生き甲斐であるか。本当の生き甲斐というものは、そういうところに発生するんだということをですね、私たちは気がつかないといけないと思うんですよ。

{10} Wir sind Menschen. Wir orientieren uns an das grundlegende Gerüst der Erziehung, welches daraus besteht, dass die zwischenmenschlichen Beziehungen den Menschen formen, und innerhalb dieses Gerüsts vertiefen wir die innere Auseinandersetzung mit uns selbst. Das ist der große Anreiz, das heißt Arbeit, und das heißt, dem Leben einen Sinn geben. Ich denke, wir müssen erkennen, dass der wahre Sinn des Lebens auf diese Weise entsteht.

## 24 療育と情緒の安定

Rehabilitation and Emotional Stability

### Heilerziehung (Medizinische Betreuung und Erziehung) sowie emotionale Stabilität

21・重症心身障害児施設というものが児童福祉法の13種類の施設にもうひとつ加わりました。

(47) 左→Recently [Translator's note: in 1967] a new kind of institution for children with severe mental and physical disabilities was added to the 13 categories prescribed in the Child Welfare Act.

24・重症心身障害児施設というものが児童福祉法の13の施設にもう一つ加わったわけなんですね。

{10} [...], zu den dreizehn Einrichtungen nach dem Kinderwohlfahrtsgesetz eine weitere Einrichtung für geistig und körperlich schwerbehinderte Kinder hinzugekommen ist.

22・児童の収容施設が収容的な保護的な機能からしだいに脱皮して、新しく療育という近代的な、または現代的な課題と取り組むようになってきたということである。

(47) 右→That is, welfare institutions for children are no longer discussed as primarily protective and accommodative facilities. Rather they are linked to the contemporary topic of providing new forms of rehabilitation [療育 *ryōiku*].

26・児童の収容施設が単なる収容的な機能からしだいに脱皮して、新しく「療育」という近代的なまたは現代的な課題と取り組むようになってきたということである。

{11} [...], dass die Kinderheime [...] allmählich über ihre einfache Obhutsfunktion hinauswachsen, und sich mit modernen bzw. zeitgemäßen Aufgaben wie der ›Heilerziehung‹ befassen.

23・そうだとすれば、根源的なものは情緒的な安定なんです。…家庭の機能というものは、子どもにとって安定した環境だということなんです。

(47) 右→The main problem for children is emotional stability and feelings of dejection. The proper function of a family is to provide children with a stable environment.

29・それは家庭的な機能というものが何であるか、根源的なものは情緒的な安定なんです。…家庭の機能というものは、子どもにとって安定した環境だということなんです。

{13} Was ist also die Funktion eines Zuhauses? Im Grunde geht es um emotionale Stabilität. [...] Die Funktion des Zuhauses besteht darin, ein stabiles Umfeld für die Kinder zu schaffen.

25・環境には、物的環境と人的環境があります。庭を美しくして花を咲かせることもいいでしょう。そして、先生との関係、子ども同士の関係、先生同士の関係といったような、人間関係が子どもの環境であります。その人間関係というものをどのように調整をしてゆくか、どのようなものにわれわれが責任をもって育てていくかということが、今日の主題となる「施設における人間関係」ということになるわけでございます。その大前提をお話したわけなんです。その上にすべての花が咲くのです。

(48) 左→Regarding the institutional environment, we have the physical environment and the human environment. In the physical environment, I would encourage maintaining a beautiful garden with flowering plants. The human environment refers to the child's relations with teachers, relationships between children and relationships between teachers. The issue of how to create relationships and what constitutes our responsibilities in terms of relationships is the theme of today's lecture as expressed in the title, "Human Relationships in Institutions." All success in education rests on the basis of human relations.

31・環境の整備は、物的環境と人的環境があります。庭を美しくして、花を咲かせることもいいでしょうね。そして、先生との関係、子ども同士の関係、先生同志の関係といったような、人間関係が子どもの環境であります。その人間関係というものをどのように調整をしていくか、どのようなものにわれわれが責任をもって育てていくかということが、これが今日の主題となる「施設における人間関係」ということになるわけでございます。その大前提を、今お話したわけなんです。この大前提の上にすべての花が咲くのです。

{14} Die Schaffung eines Umfeldes bedeutet ein materielles Umfeld sowie ein zwischenmenschliches Umfeld. Den Garten der Einrichtung zu verschönern und ihn mit Blumen blühen zu lassen, wäre eine Möglichkeit. Das zwischenmenschliche Umfeld des Kindes sind die zwischenmenschlichen Beziehungen, wie die Beziehung zu den Erziehern, den Kindern untereinander sowie zwischen den Erziehern. Wie wir diese Beziehungen gestalten und welche Art von Beziehungen wir zu pflegen haben, ist Gegenstand des heutigen Themas »Die zwischenmenschlichen Beziehungen in der Einrichtung«. [...] . Auf dieser Grundvoraussetzung blühen alle Blumen.

### 32 自分の要求を表現できない子ども（自分の欲求を表現できない子ども）

Children Who Cannot Express their Desires

#### Kinder, die ihre Bedürfnisse nicht ausdrücken können

26・しかし、世のなかには常にその代表者を送ることのできない人々がおります。子どもたちはそうです。子どもたちは自己自身を主張する方法をもちません。精神薄弱の人たちも同様です。精神発達が2、3歳でとまっているような、そういう精神薄弱の人は20歳になっても、30歳になっても自己自身を主張することが難しいわけですね。そういう人たちの欲求はいったい誰が代弁するのでしょうか。

(48) 右→However there are people in this world who cannot find representation. Children are such people; they have no way to express themselves. People with intellectual impairments are the same. It is difficult for people with mental impairments whose psychological development stopped at two or three years of mental age to express themselves even when they reach the age of 20 or 30. Who will speak for these people?

33・しかし、世のなかには、常にその代表者を送ることのできない人々がおります。子どもたちは、そうです。子どもたちは自己自身をですね、主張する方法をもちません。精神薄弱の人たちも同様です。精神発達が2、3歳でとまっているような、そういう精神薄弱の人は20歳になっても、30歳になっても自己自身を主張するということが難しいわけですね。…そういう人たちの要求はいったい誰が代弁するのでしょうか。

{14/15} Manche Menschen in unserer Gesellschaft können jedoch nicht immer ihre Vertreter entsenden. Dies ist bei Kindern der Fall. Sie haben keine Möglichkeit, sich durchzusetzen. Das Gleiche gilt für Menschen mit geistigen Gebrechen. Menschen mit geistiger Behinderung, deren geistige Entwicklung im Alter von zwei oder drei Jahren zum Stillstand gekommen ist, haben auch im Alter von zwanzig oder dreißig Jahren noch Schwierigkeiten, sich durchzusetzen. [...]. Wer wird also für ihre Bedürfnisse eintreten?

27・それを両立させるようにしなければならないということです。／先生の犠牲において子どもの幸せが守られるべきではありません。しかし、子どもたちの犠牲において先生の利益だけが守られるべきでもありません。

(48) 右 → It is our duty to insure that the interests of both parties are fairly represented. / The teacher should not be sacrificed to protect the happiness of the child. But neither should the child be sacrificed to one-sidedly protect the interests of the teacher.

34・それを両立させるようにしなければならないということです。／先生の犠牲において子どもたちの幸せが守られるべきではありません。しかし、子どもたちの犠牲において、先生の利益だけが守られるべきでもありません。

{15} Das bedeutet, dass wir versuchen müssen, beide Seiten miteinander in Einklang zu bringen. / Das Wohl der Kinder sollte nicht auf Kosten der Erzieher geschützt werden. Allerdings sollten auch nicht nur die Interessen der Erzieher auf Kosten der Kinder geschützt werden.

28・治療と教育、ドイツ語にハイルペダゴギークという言葉が昔からありますが、これは治療と教育の統合した形として用いられております。

(49) 左 → We have arrived at the issue of rehabilitation [ryōiku]. The term refers to treatment and education. The German word *heilpädagogik* has been around for a long time, and refers to the integration of treatment and education.

36・治療と教育、治療教育とか、教育的治療とか、いろいろ治療と教育という問題を含めて療育と言っていますね。ドイツ語でハイルペダゴギクという言葉が昔からあります。

{16} Unter Begriffen wie medizinische Betreuung und Erziehung, therapeutische Erziehung, erzieherische medizinische Betreuung sowie verschiedene andere Aspekte der medizinischen Betreuung und Erziehung miteingeschlossen, versteht man Heilerziehung. Das deutsche Wort Heilpädagogik wird schon seit langem verwendet.

### 38 人と生まれて人間となる

On Being Born as Persons and Becoming Human

**Als Person geboren, zum menschlichen Wesen reifen**

29・人は人と生まれて人間となる、とわたくしはそう思います。…個体の人が人と生まれて人間となっていく。

(49) 左→My view is that we are “born as persons and become human” [ <i>hito to umarete ningen to naru</i> ]. What I mean is that we are born as individuals and eventually become human beings.
38・人は人と生まれて人間となる、と私はそう思います。…個体の人が人と生まれて、そして人間となっていく。
{17} [...] glaube ich, dass wir als Personen geboren werden und zu menschlichen Wesen heranreifen. [...] Wir als Individuum werden als Person geboren und werden dann zu einem menschlichen Wesen.
32・けれども人間が人と生まれて人間となる、それは本来社会的な存在であるといいますが、その社会的存在となっていく道行きというものをわたしたちは問題にしなければならない。これを教育というのです。
(50) 左→However to say that we are born as persons and become human means that we are born possessing a social existence but we have to tackle the problem of this social existence. This is the role of education.
41・けれども人間が人と生まれて人間となる。それは本来社会的な存在であると、こう言いますが、その社会的な存在になっていく道行というものを私たちは問題にしなければならない。これを教育と言うのです。
{18} Wir werden als Person geboren und werden dann zum menschlichen Wesen. Wir sind von Natur aus soziale Wesen, wie wir sagen, aber wir müssen uns die Frage stellen, wie wir uns zu einem sozialen Wesen entwickeln. Das nennt man Erziehung.
32・人と生まれて人間となる。その人間というのは、人と人の間と書くんです。単なる人、個体ではありません。それは社会的存在であるということの意味している。関係的存在であることを意味している。人間関係こそが人間の存在の根拠なんだということ、間柄を持っているということに人間の存在の理由があるんだということ…です。
(50) 左→We are born as persons and become human. The word “human being” [Translator’s note: 人間 <i>ningen in Japanese</i> ] is written with the Chinese characters meaning “between people.” It does not refer to one person alone. It refers to having a social existence. Human relationships form the basis of our humanity which means that relationships are the reason for our existence. So having a social existence attests that we are becoming human beings. To live means that we live as social beings.
41・人と生まれて人間となる。人間というのは、人と人の間柄と書くんです。人間というのは、人の間と書く。単なる個体ではありません。…それは社会的存在であるということの意味しておる、関係的存在であることを意味しておる。人間関係こそが人間の存在の根拠なんだということ、間柄をもっているということに、人間の存在理由があるんだということなんです。
{18} Wir werden als Person geboren und dann zum menschlichen Wesen. Das Wort Mensch wird als »Beziehung zwischen Personen« geschrieben, d.h. Mensch zu sein bedeutet unter Personen zu sein. Wir sind nicht nur bloße Individuen. [...], aber damit ist die soziale Existenz gemeint. Beziehungen sind die Grundlage der menschlichen Existenz. Der Grund für die menschliche Existenz ist, dass wir Beziehungen haben.

## 42 共感の世界

The World of Empathy

Eine Welt der Empathie

33・本当は、誰でも障害を持っているんですよ。…皆さんは生まれてからすぐに日本語をしゃべったわけじゃないでしょ。生まれたときには皆、どんな姿だったか想像もつかんでしょう。写真でもあったら、それを見て、「これが私だったかしら、ずいぶん失礼しちゃうわ」なんて顔しているんですからね。この間、私にも孫ができて、見にいきましたけども、本当に真っ赤っけでしたね。どこがこんなもの可愛いかしらと思う。そのうちだんだん可愛くなってくるんだけど、最初はまさに重症心身障害児だね（笑）。

(50) 左右→In fact, everyone has a disability. We are all disabled when we are born. When you were born, you could not speak Japanese. You can all imagine what it is like when we were newborns. If you have a photograph of yourself you can take a look. When seeing yourself as a baby your response would be, "Excuse me, is that me?" I have recently become a grandfather and I went to see my grandchild. He was really red! It makes you think, what is cute about this child? Gradually the baby becomes endearing but at first the child looks seriously mentally and physically disabled.

43・本当は、障害をもっているわけですね。誰でも障害をもっているんですよ。…みなさんは生まれてからすぐに日本語をしゃべったわけじゃないしね。生まれたときにはみんな、どんな姿だったか想像もつかんでしょう。自分自身について。写真でも撮られたらそんなもの見て、「これが私だったかしら、ずいぶん失礼しちゃうわ」なんて顔をしているんですよ。この間、私にも孫ができて見に行きましたけども、本当に真っ赤っけですね、どこがこんなものかわいいかしらんと思う。そのうちだんだんだんだんかわいくなってくるんだけど、最初はですね、重症心身障害児ね。

{19} In Wahrheit haben wir alle eine Behinderung. [...] Keiner von Ihnen hat direkt bei seiner Geburt sprechen können. Keiner von Ihnen kann sich vorstellen, wie er bei seiner Geburt ausgesehen hat. Wenn Sie sich ein Foto, das von Ihnen nach der Geburt gemacht wurde, anschauen, werden Sie ein Gesicht machen, wie: »Oh mein Gott, das bin ich, ist das möglich?«. Neulich wurde ich Großvater und bin zu meinem Enkel, um ihn mir anzuschauen, aber er war wirklich knallrot und ich fragte mich, was an ihm so süß sein soll. Sie werden mit der Zeit süß, aber anfangs sind sie Kinder mit schweren geistigen und körperlichen Behinderungen; [...] .

34・ところが、その途中でどこかに障害が残った人は、それを精神薄弱といい、それを重症心身障害児とかりに呼んでいるだけのことなんであります。／わたしたちは、一生のうちいくつかの障害の足踏みをしなければならぬような壁の前に何べんも何べんも突っ立たされてきたんだけど、それを、溝を乗り越え、壁を乗り越えて、今日こうして生きてきているだけなんです。わたしたちは、いつも障害の前に置かれていたんです。

(50) 右→Those who encounter obstacles in the process of development are called mentally retarded or mentally and physically disabled. Yet all of us throughout our lives repeatedly encounter obstacles and again and again we must overcome them to move forward. We have arrived where we are in our lives by repeatedly overcoming obstacles. Obstacles are always placed before us.

44・ところが、その途中で、どこかに障害が残った人は、それを精神薄弱と言い、それを重症心身障害児とかりに呼んでいるだけのことなんであります。私たちは、ただ、幾つかの障害の足踏みをしなければならぬような壁の前に、何べんも何べんも突っ立たされたんだけど、その溝をこえ、壁を乗り越えてこえて、今日こうして生きてきているだけなんです。すべて私たちもその障害の前にいつもおかれていたんです。

[20] Wenn ein Kind jedoch irgendwann mit einer Behinderung zurückbleibt, nennt man ihn geistesschwach, und wir bezeichnen es einfach ein geistig oder körperlich schwerbehindertes Kind. Wir alle stießen in unserem Leben unzählige Male auf Mauern, auf unzählige Hindernisse, mit denen wir zu kämpfen und die wir zu überwinden hatten. Aber wir haben diese Gräben und Mauern überwunden, und heute sind wir hier. Jeder von Ihnen hatte seine Hindernisse, seine Behinderungen .

35・ここにね、心身障害とか、精神薄弱とかいわれる人々とわたしたちが、実は根が一つなんだ、本当に発達観から見て根っ子が一つだという共感の世界を——理屈の上でもせめて共感の世界というものの根拠があることを、わたしたちは知りたいと思います。

(50) 右→In this respect, we are basically the same as those people with mental retardation or with mental and physical disabilities. I am interested to know more about the world of empathy that emerges from the fact that disabled and nondisabled people share the same origins. We can see these shared origins when considering human growth from the developmental perspective. Rationally as well we can see that shared origins form the basis of the world of empathy.

45・ここにね、重症心身障害とか、精神薄弱とか言われる人々と、そして私たちとが実は根が一つだという、本当に発達観から見ても根っこが一つなんだという共感の世界を、理屈ですよ、理屈の上でもせめて共感の世界というものの根拠があるということを、私たちは知りたいと思います。

[20] Hierbei möchten wir mehr über die Welt der Empathie erfahren, die auf der Tatsache beruht, dass behinderte und nicht behinderte Menschen dieselbe Herkunft haben. Wir können diese gemeinsamen Ursprünge erkennen, wenn wir es aus der Entwicklungsperspektive betrachten, und dass diese Ursprünge zumindest rational gesehen die Grundlage einer Welt der Empathie sind.

#### 45 愛の育ち

Growth of Love

##### Wachsende Liebe

36・愛というものは、育つのです。愛がもともとあるから育つのです。愛はどこからか金で買ってきたようなもんじゃないんです。どこからかくつつくものでもない。しかし、愛が育つするには、いわゆる「愛憎」の中の愛情というものがまず育ってこなければなりません。

(51) 左→Love is something that grows. It grows because it originally occurs within us. Love is not something that can be purchased with money. Love is not something that sticks to you without your knowledge. However, for true love to grow, feelings of love that exist in the complex feelings of “love and hate” must grow first.

46・愛というものはね、育つものです。愛がもともとあるから育つのです。愛は、どこからかお金で買ってきたようなもんじゃないんです。どこかからくつつくものでもないんです。しかし、愛が育つためには、愛とか憎しみとかいう愛憎のなかの愛情というものが、まず育ってこなければなりません。

[21] Die Liebe ist nämlich etwas, das wächst. Sie wächst, weil die Liebe angeboren ist. Liebe ist nichts, was man mit Geld irgendwo kaufen kann. Es ist nicht etwas, das von irgendwoher angeflattert kommt. Doch damit die Liebe heranwachsen kann, muss zuerst die Zuneigung, die ein Wechselspiel von Liebe und Hass ist, wachsen.

36・わたくしはこのあいだ「夜明け前の子どもたち」という映画を、びわこ学園を舞台にして作ってもらいました。

(51) 左→Recently the movie *The Children before the Dawn* was filmed at Biwako Gakuen.

47・私はこのあいだね、「夜明け前の子どもたち」という映画を、びわこ学園を舞台にして作ってもらいました。

{21} Kürzlich wurde der Film »Kinder vor der Morgendämmerung« in unserer Biwako-Gakuen gedreht.

37・「最初は、こわいようだった」といわれるんです。不気味だったんですね。けれども…二時間観ているうちに、あの「ナベちゃん」だとか、「三井君」だとか、それから「シモちゃん」だとか、そこに出てくる子どもたちがいるんです。…そういう子どもたちが、「観てしまいましたらば、たいへん可愛くなりましたね」とこう言っておられました。

(51) 左→He said that he found it frightening and creepy in the beginning. However in the course of watching for two hours, the children who appear in the movie with names such as Nabe-chan, Mitsui-kun, and Shimo-chan began to grow on him. “The children became adorable after watching for a while” he said.

47・「最初は、こわいようだった」と言うのですね。不気味でね、とても感じがこわいようだったけれども、…二時間観ているうちに、あの「ナベちゃん」だとか、「三井君」だとか、それから「シモちゃん」だとかね、そこに出てくる子どもたちがいるんです。…そういう子どもたちが、「観てしまいましたらば、たいへん、かわいくなりましたね」と、こう言っていました。

{21} […], den Film »anfangs beängstigend« fand. Er hatte ein sehr unheimliches Gefühl, […] und in dem Film kommen Kinder mit Namen wie »Nabe-chan«, »Mitsui-kun« und »Shimo-chan« vor, und er sagte über diese Kinder: »Während des Films sind sie mir sehr an Herz gewachsen«.

#### 49 根を張らせる

To Put Down Roots

#### Wurzeln schlagen lassen

41・本当に子どもを育てるという場合に大切なことは、知育だけを問題にしないで、最初にいいましたことをもう一度くり返すようですけれども、本当に大切なことは、「根を張らせる」ことなんだ、根を押さえてゆくことなんだ。根を浮き上がらせたらダメなんです。だから優秀な子どもを育てたいと思うならば、アタマがいいか悪いよりも、情緒的なものを育てる。人間性というものが、しっかりとその大地に根ざしたようなぐあいに、根を押さえて張らせることが大事なんだ。

(52) 左→In raising a child it is important that we not make their intellectual development the sole issue. As I have said at the start and will repeat once again, what is truly important is to “put down roots.” Roots must be firmly placed in the soil. A child’s roots cannot be floating above the soil. To raise a child into an outstanding human being, you need to develop the emotions not the intelligence. In the development of human beings it is extremely important that the roots are firmly embedded in the great earth.

54・むしろ、本当に子どもを育てるという場合に大切なことは、知能が上がるように、知育だけを問題にしないで、最初にいいましたことをもういっぺんくり返すようですけれども、本当に大切なことは、「根を張らせる」ことなんです。根を押さえていくことなんです。こう根を引っ張り上げることじゃなくて押さえることなんです。根を浮き上がらせたらダメなんです、子どもの根を。／だからね、優秀な子どもを育てたいと思うならば、頭がいいか悪いよりも、この情緒的なものを、人間性というものがね、しっかりとその大地にね、根ざしたような具合に、根を押さえて張らせることが大事なんです。

{24} Wenn man also Kinder wirklich erziehen will, dann geht es nicht darum, die Intelligenz zu steigern oder um die Bildung, sondern, ich sage es hier nochmals, was ich bereits anfangs erwähnt habe, es ist wirklich wichtig, dass die Kinder Wurzeln ziehen können. Es geht darum, die Wurzeln unten im Boden zu lassen. Es geht nicht darum, die Wurzeln nach oben zu zerren, sondern sie fest im Boden zu halten. Lassen Sie die Wurzeln, die Wurzeln der Kinder, nicht nach oben herausragen. / Wenn man also prächtige Kinder großziehen will, ist es wichtiger als die Frage, ob sie klug sind oder nicht, sondern dafür zu sorgen, dass ihre Gefühle, ihre Menschlichkeit fest in der Erde verwurzelt sind, dass die Wurzeln halt bekommen und sich strecken können.

## 59 教育愛

Educational Love

### Liebe zur Erziehung

46・自分の話は別として、教育愛というものは、ただ、いきなりすばらしい教育愛というふうなものがあるんじゃないんです。そういうものは、さっきも言ったように長い年月の接触からわいてくるものなんです。それから、はじめはね、いやでいやでしょうがないもんですよ。こういう特にハンディキャップをもっている子どもさんの世話なんてのはね。

(53) 左右→My story aside, “educational love” [kyōiku ai] is not some kind of wonderful love that we can instantly access. Rather, as I mentioned earlier, it emerges from years of interpersonal contact. In the beginning it is extremely unpleasant, especially when one is caring for a child with a disability.

59・自分の話は別として、教育愛というものは、ただね、いきなりすばらしい教育愛というふうなものがあるんじゃないんです。そういうものはね、長い年季がかかるもんです。それから、最初はね、いやでいやでしょうがないもんですよ。こういう、とくにハンディキャップをもっている子どもさんの世話なんてのはね。

{27} [...] , und dabei möchte ich es mit meiner persönlichen Geschichte belassen. Aber eine große, wunderbare Liebe zur Erziehung kommt nicht von heute auf morgen. Die Liebe zur Erziehung ist etwas, das lange Zeit braucht, um heranzuwachsen. Außerdem macht man am Anfang diese Arbeit nicht gern. Vor allem, wenn es um die Betreuung von behinderten Kindern geht.

## 64 無財の七施

Seven Gifts without Possessions

### Sieben Geschenke ohne Besitz

50・そういう愛への高まりというものがあるということ。それから、そういう愛というものが教育の底に流れているものなんだということ。わたしたちが、人とのつきあいをしてゆきます場合に、いろいろな物質的なものを媒介にして物を贈ったり贈られたり、あるいは自分が金をもっているという安心があって、人とはじめておつきあいできるというような気持ちになることもありましようけれども、・・・「無財の七施」というものがあるんだ・・・。

(54) 左→We know that we can reach a high level of love and that love runs through the foundations of education. I think it would be wonderful if as a result of today’s talk you come away with a memory that you have heard somewhere that within human relationships – relationships that are usually based on buying and selling through the medium of material objects or relationships that are usually entered into only with the confidence of having money in one’s pocket – there is such a thing called “the seven gifts without possessions” [無財の七施 *muzai no nanase*].

64・で、そういう愛というものへの高まりというものがあるということ。それから、そういう愛というものが教育の底に流れているものなんだということ。私たちが、人との付き合いをしていきます場合に、いろいろな物質的なものを媒介にして、物を贈ったり贈られたり、あるいは自分がお金をもっているという安心があって、人とはじめてお付き合いできるというような気持ちになることもありましようけれども、ここに私が、「無財の七施」という言葉を書きおきました。

{29} Es gibt also eine heranwachsende Liebe hin zu dieser Art von Liebe. Und diese Art von Liebe durchströmt die Grundlagen der Erziehung. Wenn wir mit Menschen interagieren, haben wir vielleicht das Gefühl, dass wir nur durch verschiedene materielle Dinge mit ihnen interagieren können, z. B. durch das Geben oder Empfangen von Geschenken oder durch die Sicherheit, Geld zu haben. Übrigens habe ich den Begriff »Sieben Geschenke ohne Besitz« hier in meinem Manuskript stehen.

54・そのお声は、もう力強く気魄がこもっていました。よほど、「この子らを世の光に」という言葉のもつ重い意味をお話になりたかったのでしょう。「を」と「に」が逆になれば、この子どもたちは憐みを求める可哀いそうな子どもになってしまいます。しかし、先生にとって、この子らは、みずみずしい生命にあふれ、むしろ回りの私たちに、そして世の人々に、自分の生命のみずみずしさを気づかせてくれる素晴らしい人格そのものであったのだということをおっしゃりたかったのだと思います。この子らこそ「世の光」であり、「世の光」たらしめるべく、私たちは努力せねばならないのだということをおっしゃりたかったのだと思います。園長先生は最後に、そして一番訴えられたかったのだと思います。

(55) 右→His voice was already powerfully filled with spirit. I guess he wanted to talk about the important meaning of the phrase, "Let these children be the light of the world [この子らを世の光に *kono kora wo yo no hikari ni*]." According to the position of the particles [in Japanese] "wo" and "ni" in the sentence, one interpretation of the sentence may be "let's provide these children with light" [この子らに世の光を *kono kora ni yo no hikari wo*]." However, I think that Mr. Itoga wanted to say that in fact these children are the light of the world; these children are full of vitality and have wonderful personalities that make those of us around them and the rest of the world realize the vitality of our own lives. I believe that what Mr. Itoga wanted to urge most strongly when he said "Finally..." was that those children are the light of the world and we must exert great effort to have them be the light of the world.

69・そのお声は、もう力強く気魄がこもっていました。よほど、「この子らを世の光に」という言葉のもつ重い意味をお話になりたかったのでしょう。その「を」が「に」と逆になれば、この子どもたちは憐みを求める可哀いそうな子どもになってしまいます。しかし、先生にとって、この子らは、みずみずしい生命にあふれ、むしろまわりの私たちに、そして世の人々に、自分の生命のみずみずしさを気づかせてくれる素晴らしい人格そのものであるのだということをおっしゃりたかったのだと思います。この子らこそ「世の光」であり、「世の光」たらしめるべく、私たちは努力せねばならないのだということをおっしゃりたかったのだと思います。園長先生は最後に、そして一番訴えられたかったのだと思います。

{32} Seine Stimme war bereits wieder kraftvoll und voller Vitalität. Er wollte wohl wirklich über die tiefe Bedeutung der Worte »Lasst diese Kinder das Licht der Welt sein« sprechen. Wenn das japanische Partikel »wo« in »ni« umgewandelt wird, werden diese Kinder zu armen Kindern, die Mitleid suchen. Aber ich glaube, er wollte sagen, dass diese Kinder für ihn voller frischen Lebens sind und wunderbare Persönlichkeiten darstellen, die uns und die Welt um sie herum an die Frische unseres eigenen Lebens erinnern lassen. Leiter Itoga wollte wahrscheinlich den letzten und wichtigsten Appell aussprechen, dass diese Kinder das »Licht der Welt« seien und dass wir uns bemühen müssten, sie auch das »Licht der Welt« sein zu lassen.

55・それほど園長先生はお忙しすぎました。ご自分よりも他人、何よりも「この子ら」のために献身されました。あの時お支えた園長先生のやせられた肩を思い出して、あの肩一つに重い荷を背負わせてしまったことに深い悔恨と、何ものかへの激しい憤りをおぼえるのでした。

(55) 右→The Principal was too busy. He dedicated too much time to others and too little to himself, and more than anything else, he dedicated himself to the children. As I thought about his thin frame that I supported that day, I remember feeling deeply regretful about the heavy burdens that fell on his shoulders and highly resentful against something or someone. [Translator's note: The writer is resentful of the society that pushed Itoga to his death.]

71・それほど園長先生はお忙しすぎました。ご自分よりも他の人、何よりも「この子ら」のために献身されました。／あの時お支えた園長先生のやせられた肩を思い出して、あの肩一つに重い荷を背負わせてしまったことに深い悔恨と、何ものかへの激しい憤りをおぼえるのでした。

{32} Er war immer so beschäftigt. Weniger für sich als für andere nahm er sich Zeit, und noch mehr als für alle und für alles andere war er für »die Kinder« da. / Wenn ich an die schwächtigen Schultern des Direktors denke, den wir damals gestützt hatten, erinnere ich mich, dass ich große Gewissensbisse und heftigen Zorn darüber empfand, welch schwere Last er auf seinen Schultern trug.

#### 【付録】

76-72 資料 講義用メモ 施設における人間関係 近江学園長 糸賀一雄

77-86 付・自己実現の教育——重症心身障害児教育の実践を通して学んだもの——（『まみず』1967年1月号）

（渡部昭男作成の「日本語／英語対訳表：②③」に、筆者が「ドイツ語訳：④」及び「英語訳の基データ『柏樹社版』：①」を追記して作成。）

#### 注・引用文献・参考文献

- 1 糸賀一雄『愛と共感の教育：最期の講義（まみず新書；19）』、1969年、柏樹社。
- 2 王明洁、金栩、雨时、「糸賀一雄最後の演説—愛と共感的教育—」、神戸大学大学院人間発達環境学研究所・神戸大学発達科学部教育科学論コース『教育科学論集』18号、44-56頁、2015年、『神戸大学学術成果リポジトリ』<https://da.lib.kobe-u.ac.jp/da/kernel/81009516/81009516.pdf>。
- 3 김선옥（金仙玉）、박지민（朴祉玫）、장주선（張主善）「이토가 카즈오 최후의 강의——사랑과 공감의 교육」、神戸大学大学院人間発達環境学研究所・神戸大学発達科学部教育科学論コース『教育科学論集』19号、18-30頁、2016年、『神戸大学学術成果リポジトリ』<https://da.lib.kobe-u.ac.jp/da/kernel/81009517/81009517.pdf>。
- 4 根岸華子、中野リン「Education with Love and Empathy: The Last Lecture of Kazuo Itoga」、2018年、『神戸大学学術成果リポジトリ』<https://da.lib.kobe-u.ac.jp/da/>

kernel/81010166/81010166.pdf。

- 5 若木剛、Rose-May Lorette Wakaki（若木ローズ・メ）「L'ÉDUCATION AVEC AMOUR ET SYMPATHIE: LA DERNIÈRE CONFÉRENCE DE KAZUO ITOGA」、2021年、『神戸大学学術成果リポジトリ』<https://da.lib.kobe-u.ac.jp/da/kernel/81012935/81012935.pdf>。
- 6 川内紀世美、Roland Schulz（シュルツ ローランド）「Der letzte Vortrag von Kazuo Itoga : Erziehung mit Liebe und Einfühlungsvermögen」、2022年、『神戸大学学術成果リポジトリ』<https://da.lib.kobe-u.ac.jp/da/kernel/0100476491/0100476491.pdf>。
- 7 コトバンク「感情移入：日本大百科全書（ニッポニカ）「感情移入」の解説」、<https://kotobank.jp/word/%E6%84%9F%E6%83%85%E7%A7%BB%E5%85%A5-48902>、（2023年1月3日閲覧）。
- 8 糸賀一雄『糸賀一雄の最後の講義——愛と共感の教育——[改訂版]』、2009年、中川書店、2-3頁。講義録は糸賀自らが収録した録音テープを起こした記

- 録である。講義の最初と糸賀が倒れる数分毎の部分はマイクの故障により、また、講義の中間部分はテープ切れのために音声記録が残っていない。
- 9 糸賀一雄、前掲書、8頁。
  - 10 糸賀一雄『復刊 この子らを世の光に 近江学園20年の願い』、2003年、NHK出版、251頁。
  - 11 高谷清『異質の光 糸賀一雄の魂と思想』、2005年、大月書店、236頁。
  - 12 高谷清、前掲書、234頁。
  - 13 高谷清、前掲書、331頁。
  - 14 高谷清、前掲書、235頁。
  - 15 糸賀一雄、上掲書、2009年、14頁。
  - 16 厚生労働省社会・援護局障害保健福祉部企画課「『国際生活機能分類－国際障害分類改訂版－』（日本語版）の厚生労働省ホームページ掲載について」、2002年8月5日、<https://www.mhlw.go.jp/houdou/2002/08/h0805-1.html>、(2023年1月3日閲覧)。
  - 17 糸賀一雄『福祉の思想』、1968年、NHK出版、148頁。
  - 18 糸賀一雄、前掲書、148頁。
  - 19 中央児童福祉審議会「保育所における幼児教育のあり方について」(昭和46年10月5日)、<https://www.ipss.go.jp/publication/j/shiryuu/no.13/data/shiryuu/syakaifukushi/59.pdf>、(2023年1月7日閲覧)。保育に欠ける状況とは、「父母の欠損によるもの、父母の労働によるもの、父母や同居の親族の疾病または精神、身体障害によるもの、父母の人格的欠陥によるもの、児童の心身の障害によるもの、住居が狭小であったり、住居全体が仕事場になっているために、児童の生活の場が犯されている、といった家庭の状況によるもの、近所に適当な遊び場がないとか、事故多発地帯であるというように、地域の状態が不適当なものなどである。」とされ、これは、1963年の保育制度特別部会の「保育問題をこう考える」という中間報告で、保育に欠ける状況の定義「子どもの心身の健全な発達にとって不可欠なものが、何らかの原因によって与えられない場、現在または将来において、身体的な欠陥や社会への不適応といった悪い結果が現われることが予測されるのであるが、このような子どもの心身の発達にとって不可欠のものを与えられていない状況」に基づいている。
  - 20 中央児童福祉審議会、前掲。
  - 21 中央児童福祉審議会保育制度特別部会「保育問題をこう考える－中間報告－」(昭和38年7月)、<https://www.ipss.go.jp/publication/j/shiryuu/no.13/data/shiryuu/syakaifukushi/9.pdf>、(2023年1月13日閲覧)。
  - 22 糸賀一雄、上掲書、2009年、11頁。
  - 23 厚生労働省HP「幼稚園と保育所との関係について」(昭和38年10月28日、文初初第四〇〇号・児発第一〇四六号、各都道府県知事あて文部省初等中等教育・厚生省児童局長連名通達)、[https://www.mhlw.go.jp/web/t\\_doc?dataId=00ta8961&dataType=1&pageNo=1](https://www.mhlw.go.jp/web/t_doc?dataId=00ta8961&dataType=1&pageNo=1)、(2023年1月13日閲覧)。
  - 24 厚生労働省HP、前掲。
  - 25 糸賀一雄、上掲書、2009年、11頁。
  - 26 糸賀一雄、前掲書、2009年、12頁。
  - 27 糸賀一雄、前掲書、72-76頁。資料として「講義用メモ『施設における人間関係』」が収録され、「環境的障害、身体的障害、精神的障害」について説明している。このメモの肩書きが近江学園長となっていることから、環境的障害という概念の着想は、1968年よりも前だと推察できる。
  - 28 西原睦子、高田智行「『大津方式』の意義と今日的展開」、中村隆一、渡部昭男『人間発達研究の創出と展開 田中昌人・田中杉恵の仕事をとらして歴史をつなぐ』、2016年、群生社、196-209頁。  
1973年に全国で初めて大津市で障害児保育の制度が始まり、発達保障の理念に基づいて、希望する障害乳幼児の保育所・幼稚園の全員入園が実現した。
  - 29 荒木穂積「発達保障の誕生から50年」、立命館大学産業社会学会『立命館産業社会論集』第51巻第1号、3-19頁、2015年。
  - 30 中川恒雄「ドイツ連邦共和国基本法三カ国語対訳：第2条 [人格の自由、人身の自由]」、<https://theaterangelus.com/grundgesetz/art2/>、(2023年1月3日閲覧)。
  - 31 小宮山潔子「ドイツの保育制度の概要」、<https://www.niph.go.jp/wadai/mhlw/1999/h1137007.pdf>、(2023年1月3日閲覧)。
  - 32 齋藤純子「ドイツの保育制度－拡充の歩みと展望－」、<https://dl.ndl.go.jp/view/prepareDownload?itemId=info%3Andljp%2Fpid%2F3050326&contentNo=1>、(2023年1月3日閲覧)。
  - 33 小宮山潔子、上掲書。学童保育は10歳まで、あるいは14歳までのものもある。
  - 34 小宮山潔子、前掲書。
  - 35 Landes Berlin, Senatsverwaltung für Bildung, Jugend und Familie: *Kindertagespflege*, URL: <https://www.berlin.de/>

- sen/jugend/familie-und-kinder/kindertagesbetreuung/  
kindertagespflege/ (abgerufen am 3. 1. 2023).
- 36 ドイツニュースダイジェスト「Nr. 37 Tagesmutter  
(保育ママ)が大活躍」、(2013年7月11日)、[http://www.  
newsdigest.de/newsde/column/kosodate/5226-37/](http://www.newsdigest.de/newsde/column/kosodate/5226-37/)、  
(2023年1月3日閲覧)。
- 37 糸賀一雄『愛と共感の教育——最後の講義 (増補版)』、  
1972年、柏樹社 (白樹新書)、26頁。
- 38 糸賀一雄、上掲書、2009年、34頁。
- 39 糸賀一雄、前掲書、48頁。
- 40 糸賀一雄、上掲書、1968年、148頁。
- 41 糸賀一雄、前掲書、148頁。
- 42 糸賀一雄、上掲書、2009年、36-37頁。
- 43 糸賀一雄、前掲書、68頁。
- 44 糸賀一雄、上掲書、1968年、177頁。
- 45 糸賀一雄、前掲書、177頁。
- 46 糸賀一雄『ヨーロッパ便り』、1969年、糸賀房による自  
費出版、334-336頁。講義の翌日、糸賀一雄が亡くなる  
まで精力的に病室で仕事をこなしていた様子が記され  
ている。

# Consideration on Co-Translating 'The Last Lecture by Kazuo Itoga: Educating with Love and Empathy' into German: Hard-Earned and Fully Worked Out Translation Led to Rediscoveries

Kawauchi Kiyomi\*

## Abstract

Through co-translating 'The Last Lecture by Kazuo Itoga: Educating with Love and Empathy' into German, I considered the terms "empathy," "Director Itoga," "environmental inadequacies," "development (guaranteeing the right to development)," and "kindergarten, nursery school and day-care center" in the translation and made a comparison between the English and German translations; i.e. a comparison between a version of 1972's 'Educating with Love and Empathy: The Lecture of the Last Moment' and a version from 2009. The aim of this study is to clarify Itoga's intentions while capturing the differences in semantic content between Japanese and German. Furthermore, I attempted to reflect on the state of social welfare, childcare, and the education of children with disabilities in the period in which Itoga lived.

Kazuo Itoga used the words "*how the children develop and explore what rights to education they are entitled to*" in the lecture of his last moment, and explained a concept of development (guaranteeing the right to development) to the audience. It is said that development (guaranteeing the right to development) is not generally heard very often in Germany. However, "*Everybody has the right to self-fulfillment (development)*" has been established in the Basic Law for the Federal Republic of Germany. If the concept of development (guaranteeing the right to development) is interpreted as being included in the Basic Law, there is no need to discuss development (guaranteeing the right to development), and it is for this reason that the term is not generally heard in Germany. Moreover, comparing the English translation with the German translation, I discovered there are places in each where the terms, "desire" and "demand" are expressed in different words although, it is said that neither "desire" nor "demand" is found in these same places in the recording of the lectures itself. The intention behind the addition of "desire" and "demand" is unclear. This consideration and comparative study allowed the semantic content of terms, such as development (guaranteeing the right to development), to be examined, and led to rediscoveries. I have identified issues that need to be addressed in order to revise the German provisional translation.

**Keywords:** Kazuo Itoga, Ohmi-Gakuen, development (guaranteeing the right to development), social welfare, education of children with disabilities.

---

\*Osaka College of Social Health and Welfare, Department of Child Care and Education